

タイ農村研究への視角

——故水野浩一教授の業績をめぐって——

坪 内 良 博*

Structure and Change of Thai Villages: A Critical Review of the Late Professor Koichi Mizuno's Contributions

Yoshihiro Tsubouchi*

The late Professor Koichi Mizuno started his field study as an anthropologist in June, 1964 at Don Daeng Village in Northeast Thailand, where he spent more than a year. Based on this field work, he published about ten valuable ethnographic reports and articles in Japanese or English. Among them, his description and analysis of the multi-household compound is unique and important, in spite of the overemphasis it places on the function of this domestic unit. His neglect of mobility and population

increase is the weak point of his conceptualization of Thai Villages.

His later life was devoted to the study of socio-economic change in Thai villages. His work in collecting time-series data from certain villages is especially valuable. It is to be regretted that the data so far published are limited to the sphere of economic change and that he passed away before he was able to deal more with the socio-cultural aspects.

はじめに

本稿の目的は故水野浩一教授（以下、敬称略）の研究業績を振り返りつつ、東南アジア農村、とくにタイ農村の社会学的・人類学的な捉え方について検討しようとするものである。¹⁾ 水野のタイ農村現地研究は、1964年、当時の東南アジア研究センターのコア・プロジェクトの一つであったタイ・ビルマ地域調査に参加して、東北タイのコーンケーンに近いドン・デング村におもむいたときから始まる。同年6月、7月の2度にわたる予備調査に続いて、9月1日から翌年4月まで定着調査が続けられた。さらに1966年1月から

約半年にわたる補足調査が行われている。水野の東北タイ農村に関する業績の大部分は、上記のドン・デング村調査の産物で、最初の現地報告である水野 [1964] から国際比較の視点をもつ水野 [1976a] まで数々の報告がある。1970年4月に京都府立大学から京都大学東南アジア研究センターに移った水野は、1971年ごろから当時のセンター所長市村真一とともにいくつかの異なったプロジェクトを通して東南アジアの農村の変動に関する研究

* 京都大学東南アジア研究センター; The Center for Southeast Asian Studies, Kyoto University

1) 本稿の作成に際しては、京都大学東南アジア研究センター高谷好一、前田成文の両氏から、それぞれ東北タイ村落の移動性、fringe theoryの適用に関して、貴重なコメントを得た。記して謝意を表したい。ただし、コメントの誤用ないし拡大解釈があれば、それはすべて筆者の責任である。

に従事した。これらのプロジェクトのうち主なものは、「工業化と村落の変貌」および「東南アジアの農村開発における教育の役割」である。水野はこれらの調査計画に対して、コーディネーターとしての役割を果たすと同時に、自らタイ国のいくつかの農村で現地調査を行なった。本稿では水野の研究生生活を二つの時期、すなわち、前半の東北タイ農村調査の時期と、後半の農村変動を扱った時期に大別し、その足跡を追うとともに、今後の問題を指摘することを試みたい。

I タイ農村の構造

1 東北タイ農村ドーン・デーン村

東北タイにおける水野の調査地は、行政村ドーン・ハンに含まれるドーン・デーンとよばれる戸数132、人口810の集落で、東北タイの中心的な町コーンケーン（バンコクから約450 km）から、鉄道の沿線に沿って国道を12 km 南下し、タープラの町で左折して県道を5 km 東に進み、さらに左に折れて村道を2 km 北上したところに集村形態をとって位置している。調査時点より75年ほど前に、ローイエットやマハーサラカムあたりから移住してきた人々によってひらかれた開拓村である。この集落を対象に5篇の調査報告と2篇の現地通信が『東南アジア研究』に掲載されており、これらを有機的に関連させつつ英文でまとめられたものがCSEAS Discussion Paper No. 12-No. 22 [Mizuno 1971a]で、同時に水野の学位論文となった。ここではまず上述の5篇の邦文報告を発表年次順に紹介しつつ、水野の形成していった東北タイ農村像を描き出してみよう。

水野 [1965a] は農地所有と家族の諸形態の記述を含む、ドーン・デーン調査のアカデミックな第1報であり、重要な基礎的事実の記載を含んでいる。この村（以下、村と書くのはドーン・デーンの集落を指す）の土地

はほとんど開拓されつくしている。未開拓地900ライ（総面積の3.8%, 1ライ=0.16 ha）に関してもすべて開拓の予定がきまっている。調査村の全世帯数132のうち農家は126世帯に達する。農地の79.1%が水田であるが、稲作は天水に依存しており、収量がきわめて不安定で、自給自足的な性格が強い。米作の不安定性を解決するためにここ数年来ケナフ栽培が普及してきた。土地所有の法的な状況についてみると、完全な所有権を認められているのは屋敷地のみであり、農地はすべて仮所有権の段階にとどまっている。所有規模は76ライ（12.2 ha）に至るまで連続的であり、その間に著しい断層は認められない。農家の平均経営規模は約19ライ（3 ha）であり、自作部分が圧倒的に多い。農家126世帯のうち81世帯は「生産と消費の共同体」としての家族であり、他の45世帯はそれぞれ世帯を異にしながら、「生産面における共同関係」を軸として19の親族集団を構成している。この親族集団は、「親の家族」と、それから分岐した通常1戸または2戸の「子の家族」（娘の家族である場合が多い）から構成され、後者は前者に対して親族共同体的農業従事者となる。親族のあり方は双系的であるが、親の家にとどまって老親の面倒をみるのは通常末娘である。水田の相続分割は両親が60才を過ぎて実際に働けなくなってから娘たちに対してなされ、息子は特殊な事情がない限り水田の譲渡をうけることがない。その代りに婚姻後間もなく水牛や牛を1、2頭貰いうけたり、若干の金を与えられたりする。中部タイのバング・チャンとバン・クワード、北タイのクー・デーン、南タイのルッセンビランの人類学的調査やタイ国村落の概説書ならびに東北タイのウボンの村落調査の報告書などには、農業従事者としての子の世帯を含む親族集団についての記述はないという [de Young 1958; Fraser 1960; Kaufman 1960; Kingshill 1960;

Sharp *et al.* 1953 など]。またタイ国統計局の農業センサスもこうした実態を明らかにしていないという。

水野 [1965b] はドーン・デーングにおける宗教儀礼の民族誌的な記述を行いつつ、仏教と民俗信仰における各種の儀礼の意味をさぐろうとする。村にはひとりの僧侶と数人の祈禱師がおり、高い社会的地位を占めている。僧侶の地位は祈禱師よりも高いが、年齢が若く、また一般の社会生活から遠ざかっている。仏教行事の文脈をこえて影響力が村人に及ぶことはない。村人は仏陀に帰依し、仏陀の言葉の呪術的使用であるクン・プラ・タム(呪文・護符)の効力を信頼するとともに、クワン(靈魂)の存在を信じ、またテーワダー(天人)に加護を求める。ピーター・ヘーグ(田の神)、トゥーカタープー(村の神)などの守護霊は、仏教やクン・プラ・タム信仰により、ほとんどその形態と機能を失ってしまった。しかし、悪霊の存在は不幸や禍の原因として根強く村人の心にとどまっており、積極的に除祓儀礼が行われている。身体に宿るとされるクワンは生命の本質であり、健康を保持し、病気の快復を願い、長寿を望み、安寧を求めて招魂儀礼が行われる。招魂儀礼においても除祓儀礼においても、祈禱師を介してテーワダーが招かれ、その慈悲の力が求められる。これらの宗教上の諸活動は歴史的・形態的にみれば異なった要素から構成されているにもかかわらず、全体として一つの機能を示す。そこには、「あらゆる危険な存在からのがれ安全を求める」という態度が一貫して見出されるのである。

水野の宗教に関する報告は、水野 [1975b] にもみられ、そこではタイ人の家族生活における仏教の役割が論じられているが、純学術論文ではないためあって焦点がややあいまいである。仏教のもつ制度的な側面、例えば寺院組織や出家行動の詳しい分析が水野の調

査報告の中に残されなかったのは残念というほかはない。

水野 [1967] はドーン・デーングにおける経済生活の詳細な叙述を行なっている。水稻が主要作物でありながらその収量がきわめて不安定なため、どの農家も生計の手段として、それ以外の作物なり、農業以外の副業に依存しなければならない。ケナフや野菜の栽培、家畜の飼育・仲買、魚捕り、ござ編み、特殊技能、また最近では賃金労働などが農家の経済にとって大きな意義をもつ。それぞれの生業活動はきわめて鋭い観察に裏付けられつつ記述されている。たとえば田植えについては次のような描写がみられる。「田植は植えながら後退する。用意した苗を1束左手で持ち、右手で3〜4本ひきぬき、根本をそろえ、泥の中に押し込む。深さは親指いっぱいである。立ったまま手のとどく範囲内の直線上に5カ所植える。終わると後退して、前列とは互い違いになるように植えていく。したがって植え終わると、片腕間隔の正三角形がいくつもでき、その頂点に苗がならぶ。1ライの田を植え付けるのに4人で1時間くらいかかる」。生産活動の叙述に続いて、サンプル農家を現金収入8,000バーツ以上、4,000〜8,000バーツ、4,000バーツ以下の三つのカテゴリーに分けて、収入・支出、財産売却・購入、銀行利用・借金、生産用具・家畜・家禽所有状況、日用器具所有状況の分析がなされている。惜しいことに、そのほとんどが自家消費にまわされる米生産が収入に含まれないまま、現金収入だけによるカテゴリー化が行われているので、この後半部は水野自らが規定する「稲作を主とする伝統的な農村」の経済生活の本質を必ずしも適切に表現していないという恨みがある。調査が行われた1964年にはきわめて大きな洪水があって、ドーン・デーング全体の稲の収穫高がわずか829タング、作付面積1ライあたり0.7タング(天候にめぐ

まれた1960年は1ライあたり約18タングの収穫があった。1タング=20リットル、もみ米約10kg)に過ぎなかったことを背景にしているので、やむを得ないことでもある。水野の分析はこのような年の記録という限定された条件の下で資料的に価値あるものとみなされねばならない。

水野[1968a]ではドーン・デングの階層構造の分析が試みられる。村は無家格型の社会であって、身分階層制は認められない。家の地位は代々定まっておらず、個人の業績にもとづくところが大きい。水野[1965a]でその存在が指摘された「親の家族」と「子の家族」からなる生産共同体が、ここでは「子の家族」の自立過程を考慮に入れて家族の周期的発展段階の中で捉えられる。この集落の農地所有の社会経済的意味は、生産高が比較的高く安定しているところに比べると少ないが、このような条件の下においても、村民は上下の判定の基準として農地所有規模を考慮している。社会的地位の高い家は家族周期の後半の形態に属し、農地所有規模も概して大きく、社会的地位の低い家はだいたい家族周期の前半の形態に属し、農地所有規模も小さい。人生の出発点は親族労働者であり、一生の間に50ライくらいの農地を獲得することを目指して各人の経済活動が展開するのである。村人の相互評価は、第1に家族形態、第2に農地所有規模を考慮してなされており、水野はこのような相互評価の結果を利用しつつ、ドーン・デングの社会階層を上・中・下の三つの層に区分し、さらに各層を上下に細分する。この6段階の社会階層と経済状態とは、階層化の根本条件が家族形態にあり、農地所有は第二義的であること、および、数年来の不作のために、一貫した対応関係を示さないことについても言及されている。家族周期を重視するこの報告は、東北タイの農村社会の特色を鮮明に描き出しており、高く評

価できる。この家族周期を足がかりに、水野はのちにいくつかの理論的、あるいは比較社会学的な論文を書くことになる。

水野[1969]はドーン・デングの村落組織を叙述している。この報告は市村(編)『東南アジアの自然・社会・経済』1974に再録されており、当時の水野が自分の代表的論文と考えたものの一つである。ドーン・デングは居住地とその周辺の耕地を含む一定の地理的範囲を占め、住民はこの村に対して集団所属の意識をもっている。檀家の範囲と通学区はこの村の外に広がっているけれども、いずれも村内にあるだけに、自分たちの寺であり学校であるという意識が強い。しかし、この村は生産組織としてはほとんど無意味な存在である。共有地もない。村の社会構造は、妻=母方的要素の濃厚な双系親族組織の諸原理、およびその制度下において発現する家族の周期的発展段階上の諸類型によって基礎づけられる。家族の発展段階上の位置および農地所有規模を基盤として生ずる上層農家の世帯主は、村の社会生活の相談役であり、事実上の、あるいは擬制的な親族関係の経路を通じてその影響力を村人に及ぼす。ただし最上層の農家がフォーマルな組織を形成することではなく、またその権威もほとんど制度化されていない。村落自治の制度としては、古来、村長制があるのみであって、それも地方行政組織の一環としてはじめて明確な組織をもつに至る。かくのごとく村の構造と組織は弱いのであるが、それにもかかわらず村は一つの機能的単位をなし、伝統的な村人の要求に応じてきた。そして村落開発計画の実施にともなって、村長をはじめ、その他の伝統的指導者の地位も強化されることになった。水野の報告はこのような状況下において機能している地方行政機構の活動状況および村落自治の諸活動について具体的な事例を示している。かくのごとく、水野は中部タイのバング・チャン

を代表例とする「まとまり」を失った村に対して、東北タイにおける「まとまり」のある村の姿を浮き彫りにしたのである。

水野が提示した東北タイ農村のモノグラフは、タイ研究はもちろん、家族の比較研究においても貴重なデータであり、たとえばタイ農村研究においては、英文版である Mizuno [1968b] や Mizuno [1971a] を利用した Potter [1976] において12カ所におよぶ引用をうけたり、家族研究では森岡 [1973] において、日本家族以外の家族周期研究の一つとして注目されたりした。

2 タイ農村構造モデルをめぐる

水野 [1971b], 水野 [1975a], 水野 [1976a] は、これまでに紹介した5篇の報告を基礎として、タイ農村社会の諸側面をとくに日本社会と比較しつつ示そうとした論文であって、そこにはモデル化ないし理論化の意図が認められ、またいくつかの概念ないしキャッチフレーズが使用されている。これらの三つの論文を通して重要な働きをするのは、彼がドーン・デング調査で注目した「親の家族」と「子の家族」からなる「屋敷地共住集団」である。

水野 [1971b] は、社会学研究誌『ソシオロジ』の姫岡勤教授追悼号に掲載された論文であるが、基本的には水野 [1965a], 水野 [1968a], 水野 [1969] の手ぎわのよい要約である。水野 [1976a] は日本社会学会における報告をまとめて『社会学評論』に掲載したものであって、タイの屋敷地共住集団と日本の同族を、家族の分裂と再統合、構造と機能、持続期間、成員資格などの点から比較考察している。タイ的家族の観念が親族核（夫婦と未婚の子供から構成される単位）の「放射的拡大」であるのに対して、日本的家族の観念は「直線的拡大」として把握される。両国の間には家族という集団についての考え方やそれに対する成員個人の関わり方、言い換えれば、「集団の

在り方」に関する文化的様式に根本的な違いが見出される。すなわちタイにおいて、統制の弱い家族を前にして「間柄の論理」が重要なものに対して、日本では「集団の論理」が働いている。そして、「屋敷地共住集団」の結合原理が世帯を中心とする家庭的生活集団の次元にとどまっているのに対して、「同族」の結合原理は出自集団の次元に関わっている。同族と屋敷地集団についても、「集団の論理」と「間柄の論理」が対応するというのがその主旨である。

水野 [1975a] は、東南アジア研究センターのタイ研究グループによる総合研究報告の一章を形成するもので、ドーン・デングを伝統的な、「まとまり」のある村落の一典型として描き出している。この論文の中では、タイ人の原組織が仮説として提出される。それは、(1)二人関係の網の目の連鎖的・集合的累積体が組織を形成している。(2)しかし、そうはいっても中核になるような有力者が存在しこれが組織の結節点になっている。(3)威信の正当性の根拠は宗教的・道徳的世界観によって支えられている。(4)協力には限界があり、信頼しうる者は窮極的に自分ひとりだという意識も強い。(5)かれらにとって集団とは自分を中心として放射状に広がる二人関係の集合体であってそこで通用するのは「間柄の論理」である。(6)「あらゆる行為は自分に跳ね返る」という考え方が行為の交換に文化的な動機を与えている。

水野自らがいうように、他の日本人研究者と同様、彼自身も、「特殊日本的な概念を東南アジアの村落にもち込まぬように注意し、たえず問題を事実のなかから発見しようと試み」[水野 1973: 179] てきたのはいうまでもない。しかし、これまでに紹介してきた水野のコミュニティ・スタディは、無意識のうちに、二つの日本的な村落理解のバイアスの影響を受けていることを指摘しておきたい。その1

は「伝統的定着性のバイアス」であり、その2は「集団性のバイアス」である。

ドーン・デングは水野が書いているように、調査時点から75年ほど前に移住者によって開かれた開拓村である。開村当時は土地は住民にとってきわめてゆたかに存在していたに違いない。それが調査時点ではほとんど未開墾地を残さぬ状態になっている。この過程の背景として第1に考慮すべきは人口増加の問題である。ドーン・デングへの人々の移住自体もおそらくタイ国の人口増加が顕著になったことと関係しているであろうし、ドーン・デング成立後は集落内部で人口の増加が明らかに続いているのである。第2に考慮すべきは人口の移動性そのものである。すなわち、入念に人手をかけて耕地が完成される灌漑田地域と異なり、天水に依存する台地上の農業集落は、他の地域に開拓地の余裕があれば、その成員の一部をたえず新しい開拓地へと排出する性向をもっていたかもしれぬということである。焼畑依存度が高かったより古い時代には全集落を挙げての移動さえ行われた可能性も高い。ここで、水野の記述に対して、(1)ごく近い過去である開拓期においても、親族労働者としての子の家族が存在したか、もし存在したとしても彼らの独立時期はよりはやかっただけではないか、(2)ごく近い将来の土地が決定的に不足する状況で、親族労働者としての子の家族の独立を内包する家族周期は存続しうるか、という両面からの疑問が生ずる。後者に関して水野は他の論文の中で、中央平野部の農村を念頭におく一般論として、「人口と土地の均衡が破れたり、職業が多様化したりすると共同耕作の慣行も崩壊するので、屋敷地共住結合は存在するとしても、単なる農業上の相互扶助的な機能しか営まなくなる。そうなれば、家族の周期にもとづく村の階層化も不可能になるし、また、地主・小作関係がより重要性を帯びてくること

にもなる」[水野 1975a: 71]と変化の可能性を述べているが、変化への萌芽は若年層の相続面積の減少という形をとって、現実にドーン・デングにおいてもすでに現われているのである。水野は1976年のドーン・デング再訪(後述)を契機として土地不足の状況の重要性に気づいている。「開拓村」の性格自体についてはついに論議されることがなかったが、タイ国を含む東南アジアの平地部村落の歴史は概して新しく、開拓の進行にともなう諸状況を考慮せずに構造モデルをつくることは往々にして誤謬をまねきうるのである。一時点におけるフィールドワークから生活のパターンを発見することは人類学の重要な方法であるが、この場合には伝統的定着性のバイアスに加えて人類学的手法の非歴史性が反省されねばならない。

「集団性のバイアス」と筆者がよぶのは、「まとまり」に対するとらわれ、ないし、集団においてのみ社会の最重要部分をみようとする態度である。タイ稲作農村一般を念頭におく水野[同上論文]では、ドーン・デングはその「まとまり」のゆえにタイ人の原組織を解明するための代表として扱われ、中部のバング・チャン村は解体现象の中で位置づけられる。この見方は正しいものではあるが、無意識のうちにタイ村落を日本の村落と同じような集团的性格をもつコミュニティとしての理解へとひき寄せてしまう危険性をもつ。堤防の修理・村内秩序の維持・個人と村の繁栄を願う種々の宗教行事は村人の協力によって遂行され、村は一つの機能的単位をなしているが、同時に、水野自身の指摘するようにドーン・デングの村落の組織性は弱い[水野 1969: 707]。村落は日本の自然村のように集団の重層性を内包して組織されているのではなく、村落の枠は1枚の膜に過ぎない。そしてこの外膜は外敵や自然の脅威にさらされたときには硬質化するが、それらがとり除かれる

と存在の必要性が希薄になる。この意味で村落の「まとまり」を欠く中部平野の村とドーン・デーングとの連続性を強調する必要がある。「檀家の範囲と通学区はこの村の外に広がっているけれども、いずれも村内にあるだけに、自分達の寺であり、学校であるという意識が強い」[同上論文：694]という記述は、タイ村落における機能的な結合を寺院と小学校のみに求めざるを得なかったバング・チャン調査と対比しつつ、再検討を加えてみる必要があるだろう。

「屋敷地共住集団」はドーン・デーングにおいて水野が重視した親族集団であるが、その大きさは通常2世帯で、特別の場合のみそれを越えるに過ぎず、家族の範囲を越えるというよりは、過渡的段階に出現する拡大家族的変形世帯として理解できる。この集団の編成原理には、末娘の親世帯への残留、娘たちの土地相続権、妻方居住制を軸として、妻＝母方的要素の作用がきわめて濃厚に見出される。すなわち、ここでは水野の「放射状拡大」という表現にもかかわらず、集団編成が特定のルールの制限下にあるといえる。「間柄の論理」が強調されねばならないのは、集団編成のルールがより不明確な状況下においてである。水野のタイ人の原組織理解は、基本的に、双系的な親族関係を理念とする個人の行為の性格を強調するものであって、上述のごとき性格をもつ「屋敷地共住集団」から出発すべき論理ではない。「屋敷地共住集団」を欠く他地域のタイ人社会において、「親元組織」あるいは「間柄の論理」がむしろより有効に機能していることは、この集団を発想の根源とすることの意味を小さくする。すなわち、それはむしろ特定の傾斜をもった一つの現象の場であるのに過ぎない。マージナルな状況の中に本質をみるという方法からすれば、水野の示した集団自体がマージナルな状況であって、その中にさえ、集団編成のルー

ルが不明確なタイ社会の片鱗をうかがうことができると思うべきであろう。また、これまでに紹介した水野の論稿の中で、1カ所のみにおいてその語句が不意に出現する「擬制的な親族関係」[同上論文：697]を含む親子観念の村落の場での拡大が十分に議論されることなく、小さな共住単位に過ぎぬ屋敷地共住集団だけを手がかりに、「親元組織」が提唱されるのは論理の飛躍といえるかもしれない。

II タイ農村の変動

1 タイ農村の変容

東南アジアの農村の社会・経済変動を扱う水野の後期の仕事は、彼自身によって十分なパースペクティブが示される前に、水野の急逝によって途絶してしまった。残された水野自身の手になる報告のうち、『東南アジア研究』に掲載された2種のものは一般にも入手し易く、この種の研究を推進するために貴重な資料を提供している。

水野 [1974a; b; c] は、1972年6月から翌年3月までの調査を基礎に、1974年3月から同年9月にかけて発表された中部タイのオム・ノイ村に関する3篇の報告で、のちにこれをもとにした英文版として、Mizuno [1976b]、および Mizuno [1978b] が発表されている。水野 [1974a] では調査地の地理的・歴史的位置づけと都市化の進行の状況が叙述される。サムット・サーコーン県のオム・ノイ村 (Tambon Om Noi) の中心は、首都圏内のトンブリー中心街から国道ペット・カセムを約25km西にむかったところにある。この村はタイ国平野部における商品米耕作ブームとともに発展したのであって、1870年前後にオム・ノイ運河の周辺から開拓されていった。1957年にはオム・ノイ村の戸数は425で、そのうち303戸が水田農家であり、全体で10,224ライの水田を耕作していた。残る152戸については、129戸が労働者、10戸が商

売人、7戸が官吏の家族であった。自小作別農家形態についてみると、部落 No. 9 を除く12部落の水田農家289戸は、自作131戸、自小作69戸、小作89戸から構成されていた。1940年代にはじまる道路の発達には村人が都市の生活に直接ふれる機会を多くするとともに、都市的要素の村への進出をもたらした。それは最近では住宅予定地の出現、工場の建設、商店の増加として現われ、これらが発展していく過程で農民の生活や村落社会が根底からゆすぶられることになる。

水野 [1974b] ではオム・ノーイ村における村落構成の推移、および水田農家の適応過程が扱われる。村の人口は1963年1月から1972年9月までに3,406人から6,930人へと約2倍になっている。この間に出生率は42.0から20.1へと減少しているのに対し、社会増はきわめて著しい。ことに工場労働者世帯の増加が著しく、他方1957年の水田農家のうち、現在も水田農業に従事している者は、世代の交替をも含めて47.1%に過ぎない。オム・ノーイ村の水田経営面積は1972年には5,702ライ(1957年の55.8%)に縮小しており、1世帯あたりの平均経営面積も1957年当時の33.7ライから29.8ライへとわずかながら減少している。1957年当時の水田農家のうち一家離村者が28戸あり、このうち24戸は農業に従事している。彼らは経営条件のよいところ、もしくは安価な土地を求めて移動したのである。村に残った者は、(1)土地価格の上昇とともに農地を手放して小作農となり、(2)工場の進出によって家族および村内農業労働力を失い、(3)自分自身も農業の不利をさとして脱農転業化の道を歩むという道筋をたどった者が多い。他方、自作形態を保ちつつ、自給米生産にあまじて、経営規模を縮小して兼業化の過程をたどる者もあった。兼業化の進行とともに家族労働力はますます不足し、自作＝継続型の農家のなかには、水揚げポンプと耕耘機を用

いる機械化を進めた者が多い。

水野 [1974c] は35戸の世帯主を対象にこのような状況下における村人の生活意識をきき出している。全般的な傾向としては、非農業的職業への転換ないし併用とともに年間収入が増加し、村人自身もそれを認めている。現在の職業に対して不満を抱く者もいるが、大部分はそれに満足している。子弟の職業に対する希望として農業を挙げる者は皆無である。家族自体に関してはそれほど大きな変化はなく、むしろ基本的な様相は同一であって、その伝統的な特徴、すなわち、(1)系譜観念の希薄さ、(2)均分相続、(3)地位の継承観念の薄さ、(4)父親の統制力の弱さ、が経済活動や職業観の変化を促進している。村落に関しては、昔と同じような協力意識が存在していることが見出されると同時に、自然的環境、社会的環境の悪化を嘆く者の存在が現われる。住民の一部には部落や行政村の発展を念頭においた協力意識が認められる。ところが他方、村落の行政機構は村の急速な変化に対応しきれず、その結果、適応性を失いつつある。村人の不満や希望は、わずかに村人と村長・部落長との間の個別的な通路を経て伝えられるのみであって、それが部落なり村の問題として討議される共通の場が欠けている。村人の人生観・価値観については、「尊敬する人物」として両親、僧侶、国王が挙げられ、タイ人特有の宇宙観に支えられた社会観が維持されている。社会関係を律する価値意識についても、大勢は伝統的な価値観に対する賛同者で占めているとみなされる。

Mizuno [1978a] は、1976年7～8月における現地調査をもとに、タイ国の二つの農村における変化を記録した英文の報告である。調査村の一つ Khok Chyak は中部タイ・サラブリ県の一農村、他の一つ Don Daeng は東北タイのドーン・デーング(再訪)である。前者の開村は後者よりもやや新しく、より広

域からの移住民によるものである。いずれの村でも天水による稲作が行われているが、Khok Chyak では約 40 %の農民がとうもろこしをも耕作している。化学肥料の使用が増加したり、畑作物の導入があったほかは、稲作技術そのものには抜本的な変化はおこっていない。Khok Chyak における農民経済の向上は、作物の多様化および非農業労働の進展により、Don Daeng におけるよりも著しい。そこでは農地の細分化と同時に、農地所有の両極化がおこりつつある。子供を農業につかせたいという希望をもつ者もある程度存在する。Don Daeng では過去10年間に世帯数が132から161に増加したが、耕作面積は2,533ライから2,650ライに増加したに過ぎない。21世帯が離村しており、その大部分は新開地へとむかっている。屋敷地共住集団のパターンは保たれようとしてはいるが、土地不足のためにこのサイクルを継続できぬ人々の存在が現われてきた。農耕作業、社会保障、その他の互助における親族間の協同の機能には大きな変化はないが、Khok Chyak においては親族の経済機能が若干弱化していることが指摘されている。二つの村の記述は、それぞれ18および20戸のきわめて少数のサンプル調査を基礎にするものであるが、調査村の背景の調査にはかなりの配慮がなされており、短期間の調査にしては信頼性の高いデータが示されている。とくにドーン・デングの変化に関する資料は貴重といえる。

2 変動モデルを求めて

水野 [1974a; b; c] は当時の東南アジア研究センターを中心とする国際共同研究「工業化が村落社会に及ぼす影響」の一環として行われたものである。この共同研究はタイ、マレーシア、インドネシア、フィリピンにおいて、首都近辺の農村を一つずつ選んで比較調査を行なったもので、現地側研究者の調査結

果は、それぞれ東南アジア研究センターの Discussion Paper の形をとって発表されている。個々の報告はきわめて興味深い事実を伝えているが、都市との距離および工業化の進展度がそれぞれ異なるため、おのおのの通時的データを欠く状態で4カ村の現況を相互に比較しても、有用な結論に達することは困難であった。水野は通時的な研究の重要性を認め、オム・ノーイ村ではたまたま入手できた1957年当時の資料と現況との比較から変動をさぐろうとしたのである。稲作農村の変動に関しても同様の意図が認められ、ドーン・デング再訪は、その再調査サンプルの小ささと調査時間の制限のために情報量が限定されたとはいえ、きわめて重要な情報をもたらしている。クロス・セクション・サンプルを対象とする調査は、うまく計画された場合には、短期間の調査で変動を鳥瞰できるが、所詮、次善の方法に過ぎない。このような調査で過去の状況に関する情報が求められても、それは必ずしも信頼できるものではない。水野のオム・ノーイ村の仕事は、実際には一時点での作業であるが、既存資料を利用して通時性が求められたのである。しかしながら、水野の場合、継続性に気を奪われてタイ人社会の著しい特徴の一つである転入者の存在を軽視した嫌いがあることに注意しておかねばならない。特定の村だけを対象として変動の一般理論を導き出すことはもちろん不可能である。水野はいくつかの農村の比較を通して一般化に近づくべく歩み続けていたといえる。

農村のタイプ（都市近郊村、市場作物生産村、出稼ぎ村、自給自足的農村など）別に、生産活動から社会組織・価値意識に至る生の主要領域に関して、東南アジア農村あるいはタイ農村の変動の一般モデルを提示することがこの種の調査の一つの目標となるであろう。その提示にあたっては、(1)特定文化圏内の農村の変動に対処する特異な適応形態、(2)農村

生活における変動しないものの位置づけ、(3)伝統的価値の再解釈の問題、(4)変動にともなう不適応ないし摩擦の問題などを適切に含むものでなければ、平板かつ陳腐な目録にとどまる危険性がある。

水野の農村変動に関する報告は、以前のドーン・デーン調査に比して見方がずっとダイナミックになっているが、いくつかの調査側面でなお欠落ないし議論の不徹底を含んでいる。細かい例を挙げれば、宗教的価値の遵守が指摘されているが、その制度的行動面である出家行動が以前と同様に行われているかどうかの記述はなく、意識の次元と行動の次元とが混同されたままである。収入の増加が、寺院への寄付を含む宗教的行為の顕在面を前にも増して盛んにするのか、あるいは宗教的行為の相対的なウェイトを低めるのかということも分からない。調査計画全体の趣旨がこの種の資料の収集に十分な時間をさくことを不可能にしたことは事実であるが、水野の提示した資料が経済的変動にかたよっていることは指摘しておかねばならない。水野の示したタイ農村変動の資料は、農村の変化を社会組織および価値の面から十分に記述しているとはいえないし、一般化の方向に関してもアイデアが示されていない。しかしながら、当面では、ないものねだりは別にして、きわめて重要な記載を含んでいることが評価されねばならない。そしてこの段階で水野が急逝したことが本当に惜しまれるのである。

お わ り に

水野のなしてきた仕事を振り返ると、そこには結局ピラミッドは完成されなかった。しかしながら、水野は礎石をきり出し、運搬する作業を丹念に続けてきたといえる。空中楼閣のごとき学問的建造物が往々に目立つ中で、水野の仕事はその確実性と具体性のゆえに今後の研究の礎石となって生き続けるのである。

う。本稿における水野の業績の紹介に際する取捨選択は、筆者の興味を中心にして、その意味でバイアスを含みつつなされている。水野の仕事の中の欠陥部分を、故人に対して無礼な態度でとり出してしまったかもしれない。その全面的な責任は筆者にある。筆者はここで水野を讃美するだけによって過去に葬らず、将来にむけて活かすべく、設計図の再検討を行うと同時に、彼の残した礎石を吟味しておきたかったのである。

引 用 文 献

- 1) de Young, John E. 1958. *Village Life in Modern Thailand*. Berkeley and Los Angeles: University of California Press.
- 2) Fraser, Thomas M. 1960. *Rusembilan, A Malay Fishing Village in Southern Thailand*. Ithaca: Cornell University Press.
- 3) Kaufman, Howard K. 1960. *Bangkhuad—a Community Study in Thailand*. New York: Augstin.
- 4) Kingshill, Konrad. 1960. *Ku Daeng, the Red Tomb—a Village Study in Northern Thailand*. Chiangmai: The Prince Royal's College.
- 5) 水野浩一. 1964. 「調査村ドーン・デーン」『東南アジア研究』2(2): 112-119.
- 6) ————. 1965a. 「農地所有と家族の諸形態——タイ国東北部の稲作農村」『東南アジア研究』3(2): 7-35.
- 7) ————. 1965b. 「宗教儀礼の機能的体系——タイ国東北部の一部落ドーン・デーン」『東南アジア研究』3(3): 2-21.
- 8) ————. 1967. 「東北タイ農村の経済生活」『東南アジア研究』5: 436-462.
- 9) ————. 1968a. 「階層構造の分析——タイ国東北部の稲作農村」『東南アジア研究』6(2): 2-18.
- 10) Mizuno, Koichi. 1968b. *Multihousehold Compounds in Northeast Thailand*. *Asian Survey* 8: 842-852.
- 11) 水野浩一. 1969. 「東北タイの村落組織」『東南アジア研究』6: 694-710. (『東南アジアの自然・社会・経済』市村真一(編), 1974に再録)
- 12) Mizuno, Koichi. 1971a. *Social System of Don Daeng Village: A Community Study in Northeast Thailand*. CSEAS Discussion Paper Nos. 12-22. Kyoto: Kyoto University.

- 13) 水野浩一. 1971b. 「家族の周期と村落構造——タイ国東北部の稲作農村」『ソシオロジ』17 (1・2) : 219-231.
- 14) ———. 1973. 「東南アジアの村落研究——社会・人類学的観点」『東南アジアを考える』市村真一 (編), 157-188 ページ所収. 東京：創文社.
- 15) ———. 1974a. 「工業化と村落の変貌 (Ⅰ)——中部タイのオム・ノーイ村」『東南アジア研究』11 : 470-484.
- 16) ———. 1974b. 「工業化と村落の変貌 (Ⅱ)——中部タイのオム・ノーイ村」『東南アジア研究』12 : 25-48.
- 17) ———. 1974c. 「工業化と村落の変貌 (Ⅲ)——中部タイのオム・ノーイ村」『東南アジア研究』12 : 211-231.
- 18) ———. 1975a. 「稲作農村の社会組織」『タイ国——一つの稲作社会』石井米雄 (編), 46-82 ページ所収. 東京：創文社.
- 19) ———. 1975b. 「タイ人の家族と宗教」『アジア文化』11(4) : 35-49.
- 20) ———. 1976a. 「家族・親族集団の国際比較——タイ国と日本」『社会学評論』26(3) : 90-109.
- 21) Mizuno, Koichi. 1976b. Urbanization and Rural Change (Tambon Om Noi near Bangkok). In *Proceedings of the Third Asian Pacific Social Development Seminar, Taipei*, pp. 157-171. Seoul: Cultural and Social Center for the Asian and Pacific Region.
- 22) ———. 1978a. Change and Development of Two Rice-Growing Villages in Thailand——Don Daeng and Khok Chyak——. *Tonan Asia Kenkyu* [Southeast Asian Studies] 16: 353-377.
- 23) ———. 1978b. Urbanization and Rural Change——Tambon Om Noi. In *Geography and the Environment in Southeast Asia* (Proceedings of the Department of Geography and Geology Jubilee Symposium, University of Hong Kong), edited by R. D. Hill and Jennifer M. Bray, pp. 107-144. Hong Kong: The Hong Kong University Press.
- 24) 森岡清美. 1973. 『家族周期論』東京：培風館.
- 25) Potter, Jack M. 1976. *Thai Peasant Social Structure*. Chicago: University of Chicago Press.
- 26) Sharp, Lauriston *et al.* 1953. *Siamese Rice Village——a Preliminary Study of Bang Chan, 1948-1949*. Bangkok: Cornell Research Center.